

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月24日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520454

研究課題名（和文） 字書記述と実用例との対比から見た漢字字体規範の形成—『類聚名義抄』を中心に—

研究課題名（英文） The study of the history of orthography in connection with dictionary data and concrete textual examples

研究代表者

池田 証壽（IKEDA SHOUJU）

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20176093

研究成果の概要（和文）：

字書、韻書、音義、字様における漢字字体は、漢字それ自体によって示されるとともに、「正・俗・通・訛」等の注記によってその区別が示される。本研究では、漢字それ自体と各種の注記とをあわせて「字書記述」と呼ぶ。「実用例」は、実際の使用例という意味であり、主に取り上げるのは仏教経典である。HNG の標準的文献およびそれに準じる文献を想定している。実用例と字書記述との関係を考察するために、HNG の初唐字体と開成石経の字体の比較を行い、さらに時代によって標準字体が変化する「寂」を取り上げた。HNG に見る「寂」とその異体の実態は、南北朝・隋「冢」、初唐「寤」、晚唐「寂」と変遷することを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

While character dictionaries (zishu 字書), rhyme dictionaries (yunshu 韻書), yinyi 音義 dictionaries and ziyang 字様 character models also display the actual glyphs, it is the commentaries that categorize them as 'standard', 'vulgar', 'common', 'corrupt', etc. In this research, character glyphs and various types of commentary remarks are called together 'dictionary data'. 'Concrete textual examples' refer to actual occurrences in primarily Buddhist canonical texts. The HNG database incorporates standard texts or ones assumed to be such. In order to examine the relationship between concrete textual examples and dictionary data, I compared the early Tang court sutra with the Kaicheng Stone Classics about their character glyphs. Furthermore, I use the case of the character 寂, the orthography of which exhibited changes in different time periods. As described in Ikeda (2013), the HNG database documents the evolution of the character 寂, which is written as 冢 in the Nanbeichao and Sui periods, as 寤 in the early Tang, and as 寂 in the late Tang.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：文字・漢字字体史

1. 研究開始当初の背景

漢字字体規範データベース (Hanzi Normative Glyphs database、略称 HNG) が公開されて、中国・日本の各時代・各地域の標準字体の実態を把握することが可能となった。これを有効に利用して、古字書の漢字字体の記述を分析する方法を検討することが求められるに至った。

漢字字書における漢字の字体記述は、古文獻の解読に益する点、古逸書を引用・転載する点に注目して利用・研究されてきた。例えば観智院本『類聚名義抄』には大量の異体字とそれらに対する「正」「俗」等の注記が詳細に施されており、この字書の大きな価値と評価される。この評価は基本的に正しいが、それが行き過ぎる弊害もあって、当該字書が編纂された時代の標準字体を明確に意識して研究することはなかった。これを行うには、

I 日本・中国の各時代・各地域の標準字体の実態が解明されていること

II 漢字の字体の変遷について明確な史観を持つこと

という二つの条件を克服することが必要であるが、従来の研究では、これらを克服しないままに研究を進めていた点に大きな問題があった。

現在、Web 公開中の「漢字字体規範データベース」は、歴史上、規範の転換をもたらす影響力の強い文献、規範を忠実に反映した文献を慎重に選択して漢字字体の標準を提示したもので、『康熙字典』(1716) 以前において規範としての位置を占めていた漢字字体がいかなるものであり、それがいかに推移してきたかを包括的に示している。この HNG を基準として参照すれば、条件の I を克服することが可能と考えられる。

II は、「石塚字体変遷モデル」がその克服への道筋をつけている。これは「漢字字体規範データベース」編纂委員会の委員長の石塚晴通が提案する漢字字体の変遷モデルである。石塚「漢字字体の日本的標準」(『国語と国文学』76-5、1999) により要約すれば次の通りである。中国では、初唐(618-712)に漢字字体の標準が形成され(初唐標準)、その規範がおおむね『干祿字書』に反映する。儒教經典を石に刻んだ「開成石經」(837)の漢字字体の標準(開成標準)は初唐標準と異なる基準であり、それが宋版の実践を通じて普及・定着する。一方、日本では、初唐標準が日本的標準となる。開成標準と宋版の影響は、中世には弱く近世の版本で強くなる。例えば「来」「礼」「為」が初唐標準・日本的標準、「來」「禮」「爲」が開成標準の例である。以上が字体変遷モデルの概略である。

本研究の代表者(池田)は、日本で編纂された古字書(『篆隸万象名義』、『類聚名義抄』

等)の研究を行い、近年は、これらの古字書に記述された漢字字体のデータベース構築を行って、字書に記述された漢字字体の実態を実証的に整理・分析してきた(本調書6頁研究業績を参照)。幸いに、池田は、HNGを維持・管理する漢字字体規範データベース編纂委員会のメンバーであるので、同委員会委員長の石塚を連携研究者に迎えて、「漢字字体規範データベース」と古字書の漢字字体データベースとを統合して、日本における漢字字体の規範の形成を実証しようとする計画を構想するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、日本における漢字字体の規範の形成を、伝存する良質な字書に記述された字体規範と、初唐宮廷写経・開成石經・『日本書紀』写刊本に代表される標準的文献に使用された実用例の字体とを対照したデータベース構築により示すことを目的とする。

漢字字体の字書記述とは字体規範を見出し漢字と「正」「俗」等の注記によって示すもので、『類聚名義抄』を中心資料に据える。実用例とは典籍文書の実用例を指すが、本研究では、儒仏の經典・正史等、字体の規範を忠実に反映した影響力の強い文献を標準的文献と呼び、それらの実用例を中心資料に据えて、それらが字書記述にどのように反映しているかを実証的に明らかにする。

3. 研究の方法

字書記述と実用例とのいずれにおいても、時代・地域を異にする漢字字体資料を相互に比較することには困難が大きい。そこで標準的文献とそうでない文献とを峻別し可能な限り原本調査を実施して字体の認定を確固とした上で、標準的文献の字書記述と実用例とを徹底分析する。

具体的には次の作業を行った。

- (1) 漢字字体規範データベースに収録の標準文献から中国初唐の標準字体を反映する長安宮廷写経3点と、中国晩唐の標準字体を反映する開成石經(837年)3点とについて、比較可能なすべての漢字672字を対象として同じ字体か異なる字体かを調査する。異なる字体は、その差が大きい小さいか、包摂範囲を検討する。
- (2) 初唐の標準字体と開成石經の標準字体とが確認できる672字について、『干祿字書』『龍龕手鏡』『篆隸万象名義』『類聚名義抄』等の字書記述と比較検討する。
- (3) 南北朝・隋、初唐、晩唐(開成石經)の実用例で字体に変化のある例を取り上げて、字書記述を徹底分析する。

4. 研究成果

- (1) 初唐の長安宮廷写経3点と、晩唐の開成石経(837年)3点とで比較可能な672字のうち、字体のゆれがないのは595字(88.3%)であり、残りは宮廷写経、開成石経のいずれか、または双方でゆれがあることが分かった。
- (2) 宮廷写経と開成石経とでゆれのない595字を見ると、両者同じ字体が397字(66.7%)、異なる字体が198字(33.3%)であった。つまり、初唐の標準字体と開成石経(晩唐)の標準字体とではおよそ三分の一に相違があることを明らかにした。宮廷写経と開成石経とでゆれのない595字のうち、すべての文献で比較可能な134字あり、そのうち同じ字体が「一三上下不中之也二于云五亦人他以何光六其具利則十千南又及取可同名善四因在地大天如子家小弟得心思恭故日是時有未末本樂死求法深滅然父王生由畏百皆盡相厭知示者而聞自至行衣見言語諸身近進過道重長雖非風養高」の98字、宮廷写経と開成石経とで異なる字体が「事今來周國安尊師度後從德惡憂成所敬於明無爲爾猶甚異發益精能脩若萬起足通餘」の36字であることを明らかにした。
- (3) 日本古字書の『篆隸万象名義』『類聚名義抄』についてデータベース化を進め、漢字字体規範データベースとの比較のための基礎データを構築した。『篆隸万象名義』については全掲出字の基礎データをエクセルファイルの形式にしてインターネット上に公開した。
<http://rose.hucc.hokudai.ac.jp/~o16404/shikeda/kanjdic/tenrei3f.zip>
- (4) 「寂」の字体を例にして、字書記述と実用例とを精査し、漢字字体規範の形成を分析するための方法論を論じた。「寂」は、中国南北朝、初唐(宮廷写経)、晩唐(開成石経)の標準字体が異なること、日本文献に中国南北朝の字体の残存があること、中国・日本の古字書はそれらすべてを採録して字体の弁別を行っていることを明らかにした。
- (5) 研究成果は日本国内の学術雑誌に公開するとともに、韓国語論文を韓国の学術雑誌『口訣研究』に発表し、英語論文2本を勤務先のオンラインジャーナルに公表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① Ikeda Shoju, Chinese character glyphs as concrete textual examples vs. dictionary data, Journal of the Graduate School of Letters 8, pp.11-33, Hokkaido University, 2013. 査読無
- ② 池田証壽、漢字字体の実用例と字書記述から見た『龍龕手鏡』、口訣研究30、口訣学会、2013年2月、pp.23-52、査読有
- ③ 池田証壽、漢字の標準字体とHNGデータベース、新時代的世界日語教育研究、北京：高等教育出版社、2012年11月、pp.82-92、査読有
- ④ 池田証壽、「寂」の異体—HNGによる考察—、訓点語と訓点資料127、訓点語学会、2011年9月、pp.13-29、査読有
- ⑤ 池田証壽、日本語研究から見た漢字情報処理、跨文化交際中的日語教育研究1、北京：高等教育出版社、2011年8月、pp.865-866、査読有
- ⑥ 池田証壽、日本における辞書編纂の歴史、日本言語文化18、韓国日本言語文化学会、2011年4月、pp.23-33、査読有
- ⑦ 池田証壽、篆隸万象名義データベースの整備と問題点、平成二十二年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、高山寺典籍文書総合調査団、2011年3月31日、pp.46-60、査読無
- ⑧ IKEDA Shoju, Japanization in the Field of Classical Chinese Dictionaries, Journal of the Graduate School of Letters 6, pp.15-25, Hokkaido University, 2011. 査読無

[学会発表] (計4件)

- ① 池田証壽、漢字字体の実用例と字書記述から見た『龍龕手鏡』、国際ワークショップ「東アジアの文字言語交流上の高麗本『龍龕手鏡』」、高麗大学校(韓国ソウル)、2012年5月25日
- ② 池田証壽、日本語研究から見た漢字情報処理、世界日本語教育研究大会(招待講演)、天津外国語大学(中国)、2011年8月21日
- ③ 池田証壽、初唐標準と開成標準とから見た古字書の漢字字体、日本語学会、神戸大学(神戸市)、2011年5月28日
- ④ 池田証壽、日本における辞書編纂の歴史、韓国日本言語文化學會2010年度秋季國際學術大會・招請講演會、2010年10月13日、韓国・ソウル・明知大学校

[その他]

ホームページ等

<http://rose.hucc.hokudai.ac.jp/~o16404/>

篆隸万象名義データベース (UCS 対応版)
[http://rose.hucc.hokudai.ac.jp/~o16404/
shikeda/kanjidic/tenrei3f.zip](http://rose.hucc.hokudai.ac.jp/~o16404/shikeda/kanjidic/tenrei3f.zip)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 証壽 (IKEDA SHOJU)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20176093

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

石塚 晴通 (ISHIZUKA HARUMICHI)
北海道大学・名誉教授
研究者番号：10002289